

# 聞く「昔話」の文体

—『正部家ミヤ昔話集』編集・文字化作業から—

小林美佐子

## I はじめに 『ミヤ本<sup>(1)</sup>』の方向性と本稿の目的

『ミヤ本』の作成にあたって、編者には、当初、編集意図が二つあった。一つは、編者が聞いた話のみを、聞いたとおりに、語りの調子もできるだけそのままに残し、「語りの場」の再現に資料を近づけたいという思いであり、他一つは、この資料を資料として眠らせてしまわずに、実際に活用してもらいたい、そのため、読む人・語ろうとする人が読んでわかるテキストをもしたいということである。しかし、二つの意図は両立し難く、「読み易さを考慮した整理を、最小限にとどめる」と凡例<sup>(2)</sup>にも示したように、「語りの場」の再現には及ばないとしても、最終的には一つ目の意図を優先させた。多少の言い間違いや繰り返しはそのままにした。生きた語りはそれらをも含めてあると思つたからである。しかし、読者を想定しての文字化作業なので、「、」などの補助記号はつけた。つけるうちに、補助記号が、矛盾を強いられていることに気づいた。区切れな

い語りを区切ろうとしているのである。

耳に聞いたミヤさんの昔話を文字化する折、読むために書かれたことばとして不整合なところを、できるだけ語り手の語りをそのままに残そうしながらも読める本にしようとする、どうしても「聞いたことば」を「読むことば」のルールで切ることになる。しかし、「読むことば」として不整合な個所も、耳で聞いた実際の語りの場では、不自然を感じずに聞いていたものである。「言いよどみ」「言い間違い」「くり返し」などもそれにあるが、それだけでなく、もともと「読むために書かれることば」と質的に違う「語ることば」の在り様なのではないか、とおもわれる個所である。「読むことば」とは違う、この「語ることば」のリズムに、聞くものは身を委ねている。「昔話」のストーリーそのものを聞く楽しみとは別に、「語ることば」のリズムにも、「昔話」を聞く楽しみがあり、ここにも「昔話」があるのではないか。こうした観点から、耳に聞く「昔話」の文体について考えた。

本稿で「文体」とは、文の閑じ方、文の連ね方、会話・内話の扱い、文章の組み立て方をいう。そのとき語り手がどう語つたかを、文字化したものの中を見る。「ミヤ昔話」の文体なるものがあるとして、それをもつて「昔話の文体」とひとくくりにくくつていいのか、そもそも昔話に「文体」という定まつた形があるか、などもまた問われるかもしれない。ここでは、自分の耳で聞いた記憶と、テープを回し文字化した「ミヤ昔話」とを反芻しながら、「ミヤ昔話」の文体を、「昔話」の文体の一例と見て考察した。

## II 三つの作業に見た「ミヤ文体」の特徴

「ミヤ昔話」文字化の際、「、」などの補助記号をつける、次の三つの作業のなかで見えてきた文体の特徴を、それぞれに示す。作業は、次の三つである。

1. 句読点で切る
2. 会話を「」で括る
3. 内話を「」で括る

### 作業1 句読点で切る

句点で区切つてみると、一文中、間に説明のための挿入が入る場合、主語や目的語の倒置が見られる場合、「。」を付けるべき文末の区切れが見極めにくいい文、などが、見受けられる。また、記述の際には、幾つもの句点によつて区切らざるを得ない

が、実際の語りでは語り手はひと続きに語つっているように聞こえる文の連なりもある。

そのなかで、文頭の主語と文末の述語が一致しないものがある。会話をはさんだ一文であるが、会話の前の主語と、後の述語が一致しない。このような形の主語・述語の不一致が見られる。

### (1) 主語・述語の不一致→主語の移行<sup>(3)</sup>

資料1 「くば息子」の話例で、主語・述語の不一致の現れ方を見たい。

「くば息子」の話は、「蜘蛛婿入」のあとに、「蜘蛛息子」が続く話である。資料1に取り上げた部分は、蜘蛛の子をはらんだ娘が、そのことを父親に打ち明けた場面で、(Y)はそのときの父親の受け答えである。

Yで括った文は、①の会話文をはさんで、主語〈<sup>オ</sup>親父〉を、述語〈言われた〉が受けている。会話文①は、親父の言葉であるから、主語を〈親父〉と始めれば、述語は「言つた」となるはずのところである。ところが、述語は受身になつており、〈言われた〉とある。述語が〈言われた〉であれば、主語は、親父の話している相手、〈娘〉である。述語〈言われた〉を語り手が言うときは、〈娘〉がと、不提示ではあるが語り手の頭にはあるのだろう。いったんは主語を〈<sup>オ</sup>親父〉にして、親父の会話①を始めながら、会話が終わるころに、語り手のなか

で、〈親父〉から〈娘〉に主語が移行していくことになる。

ところで、一つ前の文も、主語は〈娘〉である。もう一つ前

の文も、主語は〈娘〉で始まる。前の文やそのもう一つ前の文と同じ主語に、主語が振りもどったのではないだろうか。句点で句切られる二文ではあるが、語り手にとって、この文は前の文に引き続く文であって、この文の述語が一つ前の文の主語であつた〈二娘〉を受け、〈言われた〉と結ばれていると考えられ

ば、一文に見る限りでは不整合だった文も、整合する。

〈言われた〉のように、述語が受身形であらわされて動作の受け手が主語に移行し、しかもその主語が提示されないパター

ンは、この語り手の場合、他の話にも見られ、「くぼ息子」は

その一例である。たとえば、(2) 主語の省略のためにあげた資

料2の「鬼の豆」、あるいは「親孝行な姉妹」(『ミヤ本』65番)

にもそうした表現を認めることができる。

〈言われた〉は、尊敬にもなりうる表現であるが、尊敬ではなく受身表現であることを、ここで説明しておきたい。

\* 「鬼の豆」(資料2・24行目～28行目)

その姉、見つけてしゃべったところ、〔その姉〕、

「今、行くわけにやいかねえがら、今に鬼、来つから。

おれ、鬼にさらえてここ」

さ来たから、鬼に見つけられれば、お前食れてしまつから」

つて、戸棚さ入れて 隠された ザもな。

\* 「親孝行な姉弟」(『ミヤ本』179頁)

「あやー、よく来た」つて、「よく無事で帰つて来たな」つて〔姉〕だつたと。「お母も、お前のおかげでよくなつてから、早く中さ入つて見る」

つて言われて、

「おれ一人こでね」「ほんとは、途中で女房もらつてき

た」

つて言つたんだと。

「いいから入れ、入れ」

つて、中さ入れられて、まんず、そこでも立派なご祝儀してもらつて、末永く、親姉弟四人が幸せに暮らすことができたんだとさ。

「鬼の豆」の例で、(戸棚さ)〈入れて〉の動作の主体は

〔その姉〕であるが、〈隠された〉のは姉でなく弟である。姉に対

してここにだけ尊敬表現を使う必要はないので、〈隠された〉

は受身である。二重傍線部の述語〈入れて〉と〈隠された〉と

の間にあるはずの、〈弟〉はが提示されないまま、主語が移行

している。

「親孝行な姉弟」の例でもやはり、〈言つて〉〈入れられて〉ともに受身で、その主語は、〈言つた〉〈ご祝儀してもらつて

と同一の主語どちらも、その前の会話文の会話主婦ではなく、〈弟〉である。ここでも、受身表現の主語は提示されていない。

このように、「ミヤ昔話」には、会話を受ける文が、前の会話文の会話主から行為の受け手に、主語が不提示のまま移行されて、受身表現の述語によって結ばれことがある。「くぼ息子」の〈言われて〉も、その受身表現である。

「くぼ息子」〈言われて〉の主述の不一致の問題に戻ると、先ほど、「一つ前の文も、主語は〈娘〉である。もう一つ前の文も、主語は〈娘〉で始まる。前の文やそのもう一つ前の文と同じ主語に、主語が振りもどつたのではないだろうか。」と述べたが、〈娘〉は、Y文の前だけでなく、Y文のすぐあと、次の段落の文（66～69行目）でも、動作の主体である。「月が満ちて、生まれてきた童子見た」のも「なんにすんべな、ど思つた」のも、「大事に乳飲ませて育てた」のも、動作の主体は、〈娘〉である。動作の主体だが、省かれて、提示されていない。

さらに、〈娘〉が主語であるのは、ここ、Y文の前後だけではない。資料には、主語が〈娘〉と提示されている場合は、娘と□でくくり、不提示の場合は、□のなかに矢印を入れてカタカナで「ムニ」と示した（➡ムニ）。資料一枚目、すでに場面が設定されようとするあたりから、〈娘〉は多く主語になつており、しかも不提示であることがわかる（不提示であることについては、次の（2）主語の不提示で詳しく触れる）。

不提示のこの〈娘〉を芯に、語りは、句点を越えて、続いているのではないか。読むための文は、「…と。」と句点で区切らざるをえないが、語り手において文は続いている。Y文の述語〈言われた〉は、Y文以前のその「芯になる主語」〈娘〉を受けていると、Y部分での主述の不一致に対しても、このように考えられるのではないか。

「芯になる主語」〈娘〉は、語り手が語るうちに語りの下に沈み、語りの芯になつた人物ではないか。語り手が芯にしているために〈娘〉は主語になりやすく、また主語にならない文（一文の主語が、他の周辺の人物である場合）でも、一文の主語の陰に潜在して、文はいつでもこの「芯になる主語」にとつて替わられようとしてあつたのではないか。

「くぼ息子」で見た主述の不一致は、文頭の主語が予定していた述語に対し、文末に至る間に、陰にあつた「芯になる主語」に主語が振りもどつて、対する述語が結果としてされたものである。語り手がここで芯にしている〈娘〉は、場面展開上、要になる人物でもある。主述の不一致は、語り手が、周辺の人物を主体とする文を、要の人物を主体とする文へ、無意識に振りもどしたもので、語りの自然な在り様であると考えられる。「芯になる主語」の存在は、この語りが芯になる一人の登場人物の視点から語られている、つまり話の外でなく話の内部に、語る目があつて、そこから場面が描かれ叙述されていることを物語っているのではないだろうか。

読む文としては不整合となつたずれであるが、耳に聞いたときには、聞くものに不自然を感じさせなかつたものである。語り手もまたごく自然に語つていた。それを矛盾と意識するほど、語り手にもともと主述の一一致に対する厳密な認識があるわけないかもしない。主語という意識も、かすかで曖昧なものであろう。ただ、この語り手が、主述の一一致にたいして全く無頓着かといふと、かならずしもそうでない。のちに私達が翻字したものを目で見直したとき、彼女が同様の個所であらためて主語を入れようかとしたことがある。その彼女が、語つ際には、無意識のうちにそれをそのままに語り、聞く方もそれを意識せずに流してしまひえたのは、昔話が「読むことば」ではなく、「話すことば」「聞くことば」であり、時間によつて主述認識が解消されてしまったからである。しかし、語る側、聞く側がそれを意識しない理由はそれだけでないようと思える。〈娘〉は、この場面の要になる登場人物だと述べた。要になる人物を芯にした語りが、語る側と聞く側で了解され、共有されていたから、〈娘〉に主語が振りもどり、しかも不提示であることが、語る側聞く側双方にとつてごく自然な流れだつたのではないだろうか。

主述の不一致と見えた現象は、語りの芯に関わると述べた。次に挙げる主語の不提示にもまた、さきほど少し触れたように、語りの芯に関わる例がある。

（2）主語の不提示  
「ミヤ昔話」のなかで、主語が明示されずに語られている文には、いくつかの場合がある。（a）前文と同一主語で、繰り返しになる（b）登場人物ふたりのやりとりが、会話だけで進行し、会話主が示されない（c）主語を示すのは新たな登場人物だけで、すでに登場していた人物の方は不提示、などである。提示しなくとも聞き手にわかると、語り手が思うからで、これは語りのテンポを早める。

ところで、（a）（b）（c）以外に、次のような例がある。一文中での主語述語の矛盾例ではないが、前の文で周辺人物を主語としていたものが、次の文で、主語が提示されないまま、要になる人物を受けた述語で文が結ばれる例である。

#### 資料1 「くぼ息子」の前半部分で、その例を見たい。

主語の〈娘〉が省かれた個所には、挿入の矢印を□でかこんで書きこみをいたが、主語である〈娘〉が、何箇所か示されていないことがわかる。主語〈娘〉は、常に一貫して隠れて見えない、というわけではない。〈若者〉と並んで、しつかり主語としてしめされているところもある。また、〈娘〉が主語になる文がつづくところで省かれているのは、繰り返しのためであろう。繰り返しの為に省かれることは、〈若者〉や〈親父〉にもある。

しかし、それらの不提示と異なり、〈娘〉と〈若者〉の会話場面（11行目～24行目）での〈娘〉の不提示は、娘が“芯にな

る主語であることによるものではないだろうか。「若者」の問い合わせに対し答える「娘」のことばは、●<sup>2</sup>と●<sup>4</sup>の文だが、●<sup>4</sup>の会話主が示されていない。『三文から五文ぐれにしかなんねます』のあとに、〈娘〉が入っていない。ふたりのやりとりであるから、「その男」の問い合わせたいする答えとなれば、「娘」だとわかるが、「男」のほうを省くことも、あるいは両方省くこともかんがえられるところである。だが、語り手が提示しないのは〈娘〉である。「男」のほうは省くことをしていない。

会話のすぐあと、●<sup>6</sup>の文でも、〈娘〉を主語にして、これも不提示である〔そして、その男どして話こして、錢こもらつて、そして帰つたんだと家さ。〕●<sup>6</sup>の文は、○<sup>5</sup>の「若者」の

会話のあとにつく文だが、語り手の中で、この●<sup>6</sup>の文は、むしろ、直前の若者の会話（○<sup>5</sup>の文）を越えて、さらにもう一つ前の娘の会話（●<sup>4</sup>の文）を、直接うけているのではないだろうか。語り手が、〈娘〉を主語にしてしかも提示を必要としているのは、●<sup>4</sup>の会話主と同じ人物に主語が振りもどり、繰り返しになると感じているからであるようみえる。○<sup>5</sup>の

会話が「男」を会話主としていても、つづく●<sup>6</sup>の文が、そのまま「男」を主語にしてはいない、あるいは、「男がああして、娘がこうして、…」とも、「ふたりは互いに：」とも語らず、〈娘〉を主語としているのである。同じように、●<sup>4</sup>の会話もまた、さらに二つ前の〈娘〉の会話（●<sup>2</sup>）を直接受けているとみることができる。

●<sup>2</sup> ●<sup>4</sup> ●<sup>6</sup>の文を貫いて、「娘が」という見えない主語がここにはある。語り手において、「娘」という人物が一人、この場面の語りの芯にあるので、文の主語は娘に傾き、しかもことさら提示するまでもないということではないだろうか。

このように、〈娘〉を主語に、しかもそれは提示せず、むしろ相手の登場人物（たとえば「若者」や「親父」）だけを示す文は、ここだけでない。「くば息子」の前半、広い範囲で見られる。ム<sup>2</sup>ム<sup>3</sup>（6、7行目）、ム<sup>5</sup>・ム<sup>6</sup>・ム<sup>7</sup>・ム<sup>8</sup>・ム<sup>9</sup>（22、25、29、30、33行目）、ム<sub>14</sub>ム<sub>15</sub>（66、69行目）など、挿入の矢印の書き込みを入れた何箇所かに渡る。

これらの個所では、場面を、語り手は、もつぱらこの〈娘〉に寄り立ち、そこから語り描いている。この〈娘〉は、場面の一登場人物でありながら、語りの芯になつて語られるときには、聞き手からも黒子のように見えない人物となる。語り手は、〈娘〉の周りに見えたように描き、聞き手もそのように聞く。見えない芯を持つ語りは、そうした空間を昔話に与える機能を果たしている。

そして、月が満ちて、生まれてきた童子 ← ム<sub>14</sub> みたびこら、面は立派な男童子だったんだ。そだとも、腰より下は、足がくぼのようになつて、足がねがつたんだと。〔…〕って、← ム<sub>13</sub> 言われたずもな。… Y 文のあと)

この一節でも、聞き手は、語り手とともに、芯になる〈娘〉の目から、生まれてきたくぼの息子の姿を見ている。

ところが、その〈娘〉も、後半「蜘蛛婿入」から「くぼ息子」に話が移ると、〈息子〉の方が主語不提示になり、〈娘〉のほうは提示されて、しかも「そのおふぐろ」と、呼び名も息子に対する関係からの呼び名にかわる（93行目、ゴシックで示したム<sup>17</sup>の個所）。芯になる主語が替わり、語る目の位置も移つたのである。

主語の不提示にもまた、このように、語り手が入れるべきところに主語を入れ損ねたのではなく、芯になる人物の存在が、語り手と聞き手の間で認知されていたことに拠るものがある。すでに（1）所述の不一致でも述べたが、語りのベースに、芯をもつ。語り手は、話の外からではなく、話の内側、芯になる人物を通して、そこから見、叙述する。これが、「ミヤ昔話」の一つの文体を成し、語り方の実際だったのではないだろうか。

話の前半・後半、ところどころで、その場面の話を運ぶ登場人物を、みえない語りの芯に据えて、その人物の周りに広がる空間を、聞き手の周りに広がるように昔話を語る。そうした語り方は、次の会話や内話の示し方にも影響しているように思われる。

の文から独立させて表記したが、会話の括りが明瞭でないと思われた個所がある。

資料2 「鬼の豆」は、「鬼と賭け」の話であるが、弟が見つかってしまい、その場面での、姉と鬼のやりとりの個所である。

## 作業2 会話を括る（会話を「」で括つて表記する）

『ミヤ本』編集作業では、会話を「」で括り、改行し、地

文だが、なお、会話が、登場人物たちの交わす会話の現場を眼

前に彷彿とさせる表わし方にもなつて、この二つをどちらも手放さずに語る。これが、「ミヤ昔話」に見られる語りの実際なのではないだろうか。

「ミヤ昔話」には、劇の台本にあるような、登場人物のせり

ふとト書きのように語る場面もある。だが、ここに見た語り

(「――でくくりきれない語り）は、それとは異なるものだ。昔話の語りをそれと区別するものだろう。

### 作業3 内話文を括る<sup>(4)</sup>

内話文に対しても、括ろうとして括れなかつた個所がある。

資料3 「極楽見てきた婆さま」は、姥捨ての話で、突き落とされた婆様が、はいあがつてくるところだが、ア、イでは、〈やマカッコ〉内を、登場人物「婆様」のせりふとしてはつきり括ることができる。ところが、ウは、〈ああ、そんだそんだ…〉と「婆様」の心内語（心中の台詞）のせりふとして語り始められるものの、それが「氣」の修飾句になつて、そのまま、文の終わりは「の気がした」と、地の文に収まつてしまつているのだ。一人称直接話法のように語り始められながら、結局地の文にくみこまれて終わる例である。

内話文が地の文に注ぎ込んでしまう例は、この一例に限らない。このように、内話もまた、語り手にとつて地の文から明瞭に切り離せないものであるとするならば、会話でも内話でも、結局のところ、語り手は自身の位置を、叙述者の立場を離れて登場人物になりきるところにも、また登場人物に一定の距離を保つて叙述に徹するところにも、定めていないことになる。

記述作業でみた「ミヤ昔話」の文体は、語るリズムと昔話空間の作りに、つぎのような特徴をもたらしているようにおもわれる。「ミヤ昔話」を語るリズムには緩と急がある。文字化の際に、句点で区切り、段落を改めるべきところも、実際の語り手と聞き手の間では、ときに一続きの語りである。そこで語りは急で、話は一続きに進み、場面は一気に展開される。また、一続きの語りは、一人の人物を芯に、しかもそれを示さずに行なわれ、他の人物は、その人物との関係においてしか語らない。一続きである一方で、主語に関して極めて節約された語り方がなされてゐる。主語に関して節約型の語りは、昔話の語りを、スリムなものにする。そのスリムな語りの線上に、語るにも聞くにも、複数の主語が示されるよりはるかにつかみやすい形で話の筋が展開される。理に適つて無駄のない語りの方法である。

つぎに、昔話の空間についてであるが、「ミヤ昔話」を語る語り手の位置は、場面や登場人物に対し一つに固定されない。一人の芯になる人物から、しかもそれを明示しない語りでは、語り手はこの人物が見たように空間を描く。空間をとらえる視点はその芯になる登場人物にある。語り手は昔話空間の内側に

位置しながら、かつそれを叙述しているといったらよいだろうか。このことは、聞き手にも共有される。

つぎにあげる「話買った男」の一節で、聞き手がいつのまにか、芯になる登場人物（この話では〈話を買った男〉）とともに話の筋を歩いてしまうとするならば、それは、今述べたような、語り手が昔話空間の内側から、芯になる人物から話を叙述するという特異な語りの方法がもたらしているのではなかろうか。叙述は、『芯になる人物を明示しない』という語りに、支えられる。

出はって、相手の人達どこいらさ行つたべな、と●思つて、へ「一所懸命急いだども、相手の人達さハア、●追つつかねかつた」と。そうするうつに、暗くなつたすもな。へ「さあ大変だ、暗くばなつたども、三両あつたやづ全部●取られですまつた」と。こ

ところで、芯になる主語から語る語り方を、話の初めから最後まで一貫してとるわけではない。複数の人物それぞれに距離をおいた語りもある。たとえば、資料1の「くぼ息子」のXの個所、「そうしてゐうづに、その若者と娘つこと仲えぐなつてしまつたんだと。」（資料1・28行目）や、結末につけたZ「だから、その家で、そのくぼ息子のお蔭で、たいした長者どんになつたんだどさ。」（資料1・116行目）は、語り手が場面を鳥瞰して語つている。

「一人の人物から語る語り」と、外側から場面を鳥瞰する語り<sup>10</sup>とが、話の初め、話の終わり、あるいは話の節目節目などで、交叉する。話が流れるところでは、語り手も流れのなかにある。そしてまた、ストーリー展開の節目、ストーリーの終わりで、場面の外側にてて、捉え直す。このように、語りが内側と外側から入れ替わつて語られることが、「ミヤ昔話」にはある。

ここに、内話のカギ括弧を入れるとしたら、「と思つて」の前だけだろうか。へ「一所懸命急いだども、相手の人達さハア、追つつかねかつた」（「と。」の前まで）は、全くの地の文の叙述だ

ろうか、内話をも含んでいるのだろうか。へ「さあ大変だ、暗くなつたども、三両あつたやづ全部取られですまつた。一文無しだ」（「と。」の前まで）はどちらか。どちらともとれるこの文体が、聞き手を〈男〉とともに歩かせてしまうのではないだろうか。●部分に主語が入つていたら、そのようにはならない。

もつており、その定まらない文体が昔話の文体であり、それを可能にしているのが「語り」であることを、今回「ミヤ昔話」を文字化して確認した。今後他の語り手の昔話にも広げて、これらのことについて、更に検証していきたいと思う。

#### 付記

本稿は、2003年度日本口承文藝学会年会での研究発表草

稿をもとにまとめたものです。

本稿では、昔話の語りを、「文体」から見ました。語りは、語り手のなかで完結せず、「ミヤ昔話」の語りに対する聞き手の参加は、相槌と笑い、目のやりとりほどのものですが、それでも、語りが、やりとりのうちに生きていた記憶があります。あの生きた語りを、どう解きほぐすことができるか、入り口に立つて暗中模索の状態を切り開きたく、御教示をいただければと思い、投稿させていただきました。発表からこれまでにも、幾多の貴重な御助言をいただきおり、ここに深く御礼申し上げます。

#### 注

- 『正部家ミヤ昔話集』は、2002・11古今社より刊行。  
編者は、小池ゆみ子・小林美佐子・田中浩子・丸田雅子。  
便宜上、本論では『正部家ミヤ昔話集』を『ミヤ本』、そ  
こにとられた昔話を「ミヤ昔話」とよぶ。
- 凡例には、「六、本書では、ミヤさんの語りに添うように

記録することにつとめたが、翻字にあたっては、読みやすさを考慮して最小限の整理を行なった。」と記した。

- 3 本稿では、主語・述語の関係から書き起こしたので、「主語」を使つたが、使つた「主語」には会話主や動作の主体なども含む。不適当かと迷つたが、やむをえず用いた。

- 4 編集開始時、内話文を「」で括ろうとしたが、最終時に

は括らなかつた。

#### 参考文献

- \* 小澤俊夫 『昔話の語法』(福音館書店 1999)
- \* 石井正己 『遠野の民話と語り部』(三弥井書店 2002)
- \* 川森博司 『日本昔話の構造と語り手』(大阪大学出版会 2000)
- \* 川田順造 『口頭伝承論』(河出書房新社 1992)
- \* 高木史人 『昔話の〈場〉と〈時〉』(岩波講座日本文学史) 17 岩波書店 1997
- \* 藤井貞和 『平安物語叙述論』(東京大学出版会 2001)
- \* 藤井貞和 「騙りの創發」(藤井ほか編『創發的言語態』東京大学出版会 2001)
- \* 中川 裕 「アイヌ文学の人称」(久保田淳他編『岩波講座日本文学史』) 17 岩波書店 1997
- \* 中川 裕 「口承文藝のメカニズム」(藤井ほか編『創發的言語態』) 東京大学出版会 2001

86 くぼ息子

←ムロ・ ←クロ：ココに主語「娘」・くぼ息子が、不提示で

あることを示す。

「親父」「その若者」の不提示は図示して  
いない。

むかす、あつたずもな。

あるとこに、なんにもかにも、仕事ねえから、いつつも山さ  
行つて、青物とつてきて、親父ア、その青物、町ア持つてつて、  
売つてきて、暮らしてらつたんだと。

そしたどこら、その親父、ある時、病氣にかかつてしまつた  
ずもな。なんとしても、木つこの青物もとることアできなくて、  
娘ムロ、代わりに山さ行つたんだと。そして、青物とつ  
てきて、それ売つて、親父のどこ養つていだつたずもな。

ある時も、山さ行つて、青物とつたり、柴つことつたり  
していたとこら、立派な若者來たつたど。そこで、ペつこ休む  
べなど 思つて休んでらどこら。そしてがら、

○<sup>1</sup> 「お 前、なにしてら」

つて聞たずもな。ムロ その娘、

●<sup>2</sup> 「いや、今までおら 家の父来て、稼カシメでもらつたども、  
案配悪アヘンくなつたにがつて、おれ、代わりに青物つことつて、  
それ、町ア持つてつて売つて、米つこだの味噌つこ買つて、暮

らし立てました」

つて言つたど。したつけ、その男ア、

○<sup>3</sup> 「ほんだらば、その青物売つて、なんばばかり錢ジエニいもらう」

つたど。だから、

●<sup>4</sup> 「二文から五文ぐれにしかなんねます」

つて ←ムロ 言つたずもな。そしたどこら、その若者ア、

○<sup>5</sup> 「そんだらば、その三文だり五文ぐれの錢ハナダこだらば、おれ、  
けるから、おれどして、今日、話こすねが」

●<sup>6</sup> そして、その男どして ←ムロ 話こして、錢ハナダこもらつて、そし  
て 帰つたんだと、家さ。

それ、しばらく続たずもな。

(X) そうしてるうづに、その若者と娘ムロこと仲えぐなつてすまつ  
たんだと。腹ウオつこ大つきくなつたずもな。そうすると、あ  
や、大変テスヘンだ。おら、なじよしたらいがんべと ←ムロ 思つて、ある

時、その若者さ、

「なんだか、おら、腹ウオこ大つきくなつたよんたや」

つて ←ムロ しやべつたずもな。

そしたどこら、その若者、

「ああ、そうか。本当のことア、おれ、それが願いだつた。そ  
れがおれの望みだつた」つて 言つたど。「おれが人間でねえ

ぞ」つて言つたずもな。「おれ、本当のことア、くぼ(くも)だ」つ  
て言つたど。「くぼだども、なんとしても、我が子ムロともうもの  
欲しくて、お前の腹を借りて、おれ、子どもを 身籠ムロらせた。

その童子、なんじよにか生んできろ」つて頼んだずもな。

「それは、なんたな醜い者に生まれてくつかもわがんね。おれに似た子が生まれつかもしれね。そんだも、その子どもは大きくなれば、絶対、お前達の役に立つから、なんじよにが、その子ども大事に育ててけろ」

言つたゞもな。

ムー<sub>1-0</sub>【その娘】もたまげだぞ。そして、身でらどこら、今まで立派な男だった男ア、くぼになつて、大つきな足、こうしてワサワサ山さ入つてつてしまつたと。

ムー<sub>1-1</sub>【その娘】泣きながら、家さ帰つてきたんだと。して、親父さ

「本当のことア、おれ、今まで、毎日、若え兄<sup>わせえに</sup>こと話つこしたり、遊んだりしてきてらつた」つて、「そだも、毎日、青物とつた

より、いつ佩え錢<sup>さき</sup>もらつてきて、それで、お父ちやとして、暮らししてらつた。そして、おれ、腹つこ大つきくなつてしまつて、今日、その兄つこさ、腹大きくなつたことやべつたどこら、『本当のことア、おれ、くぼだ』つて、しゃべられた。『くぼだども、その、くぼの子どもだども、なんじよにか生つてけろ、絶対、お前達の役に立つと思うがら、生つてけろ』つてしゃべらえだ

ムー<sub>1-2</sub>【娘】家さ来て、親父さ泣きつうたと。

(Y)

① 「なんじよにされはで、できたもんだつたらば生せ。そして、

したところ、親父も、

生せ。そし

60

55

50

45

40

て、そのくぼ、大事に育てろつて言われたつたらば、大事に育てんべし。お前<sup>めぬ</sup>も、それ好きで、腹<sup>はら</sup>大きくなつたんだから、大事に育てていくべし、生しえ

て

ムー<sub>1-3</sub>

言われた

づもな。

面は立派な男童子だつたんだと。そだも、腰より下は、足がくぼのようになつてて、足がねがつたんだと。なんたにすんべな、ど

ムー<sub>1-4</sub>思つたども、大事に乳飲ませて育てたと。

そしたどこら、ク<sub>1</sub>【その童子】ア、だんだんに大つきくなつたど

こら、

「お母、お母、申すわけねえけども、おれさ、こ<sub>2</sub>のおどしつこさい、

穴つこ開けでけろ」

つて言つたゞもな。

「なにする」

ムー<sub>1-5</sub>たつけ、

「おれ、そ<sub>3</sub>さ入つてて、手仕事<sup>て</sup>、すからよ」つ

ムー<sub>2</sub>て言つ

たど。して、ク<sub>3</sub>【お爺<sup>おとう</sup>さん】が、木つこだのなに集めてきてける」つたと。して、ク<sub>4</sub>「おれさ、鉛つこだの、小刀つこだの買つてけろ」

そして、木つ肩つこ<sub>5</sub>集めてくると、それで、美すうな杓<sup>しやく</sup>子つここしやだり、へらつこしやだりしていだつたずが、だんだんに、その木つこで、おもちゃつこしやるようになつたずもな。おもちゃつこ<sub>6</sub>しえだりして、みんなさ、それやつ

80

75

70

65

て、喜ばれていだつたど。

そうしていたつたずが、ある時、その長者どんの娘が腹病やして、あの、お産するどこで、うーんと腹病んだんだと。なん日たつても生しえねがつたんだと。そしたところ、その、  
ダくば息子ア、

「ああ、困つたな、それア。どどどがさ行くど、水こ流れでつから、その水こ汲んできて飲ましえれば、なんなく生すんだがな」言つたずもな。「それづ、教えてける」

つしやべつて。<sup>ムツ</sup>【そのおふぐろ】が、「そこ」に、こういうふうなど「あつて、そつからチョロチョロと流れてら水こあつから、その水こ汲んできて飲ませてみろ】つて、おれ家の息子しやべつてらが

つて言つたんだと。したつけ、

「なんに、あのくば息子、なに見て」<sup>カバ</sup>

つて、最初みんな悪口したと。

だども、そこの家の旦那殿ア、

「んだらば、その水こ汲んてきて、飲ませてみんべし」

つて、水こ汲んできて飲ましえたと。そしたどころ、いかにも

本当に、苦もなく、安産で童子生すにいがつたんだと。

それから、評判になつて、そしてまだ、

「切り傷とか、なにか傷こあつとこさば、その水こつければ治るし、腹痛時も、その水こ飲めばいいし」  
つて、<sup>ムツ</sup>教えたんだと。それして、みんな治つてつたんだと。

んだがら、→タヨ評判になつて、次から次と、

「おれ、今度ア、こんな病えしてゐるが、なんじよにせばいい」

つて聞きさ来んだと。それさば、「ムツ」こうやしてみろ。こじさば、この水こつけてみろ。あ

そこさ、こうしてみろ」

つて、みんななさ→タヨ教えて、みんなから、どんどん、どんどん、札もらつて、今でハア、本当にたいした裕福な暮らすように、なつたんだと。

(乙) だがら、その家で、そのくば息子のお陰で、たいした長者どんになつたんだぞ。どんとはれ。

## 資料2 『正武家ミヤ昔話週』 241頁→242頁

94 鬼の豆

むかす、あつたずもな。

あるところに姉弟まりいたつたずもな。

その童子達ア、ある時、山さ栗拾しえに行つたずもな。そして山さ行つて、栗つこ拾つてるうづに、姉どこさか行つたか、なんぼ、

「姉つこー、姉つこー」

つて、叫んでも一向いねがつたずもな。そしてハア暗ぐなつてもしまつたす、その弟童子、一人つこで家さ来たずもな。家さ来てみだも、なんぼ搜しても姉つこいなかつたど。

また次の日、山さ上がつて尋ねて歩つたども、きのう栗拾つた山さ。そして、そこいら見たんども、なんぼしてもいねがつ

て、喜ばれていだつたど。

100 85  
105 90  
110 115

たす、なんぼ搜しても、なんにもその姉つこの物らしえ物、ねかつたずもな。そして姉つこ、搜して搜して行つたとこら、ずーと山奥さ行つたとこら、姉の着てら着物の切れ端が、木の枝さ掛かつてらつたと。あやーおかすな。姉つこ、こななとこまで来たべかと思つて、そごら搜して歩つたとこら、それ姉の物があつたんだ。着物の袖が掛かつてらつたんだと。それ見て、あー姉つこ、おれ搜してこづ印でねがなと思つて、またどんどんん、どんどん山さ上がつたと。そして行つたとこら、笹つ葉この陰さ隠れたり、そつちの枝つこと隠れたりして、その弟ア姉の後を追つかけて山さ上がつてつたつと。

姉の行つたとこさ行つたずもな。そして、ここに姉いたかしんね、と思うとこさ行つて姉搜して行つたど。

「はやく姉、あんべ」

つて。\*その姉、見つけてしゃべつたとこら、**【その姉】**

「今、行くわけにやいかねえがら、今に鬼、来つから。**【おれ、鬼にさらえてここさ来たから、鬼に見つけられれば、お前食れてしまつから】**

つて、戸棚さ入れて隠されたずもな。

そしたらうづに、鬼來たつたと、

「なんだかおかすな、なにがあつたでねえか」

つて

「なんにもねえます」

つたけ、

30

25

20

15

「ほんだつて、おかすぞ。**【人臭えー、人臭えー】**  
つて鼻ならして歩つたと。したとこら、その弟隠してらとこ見つけたずもな。だから、その姉、

**【ほんと迎えに来た】**  
「ほんのこと、今、弟ア尋ねてきたども、それ弟だます。おれ

言つたずもな。そしたば、その鬼、

**a【その弟、出しえ】**つて、「おれ、食うから」

つて聞かねかつたと。だども、その姉のごつたがら、  
**b【その弟、取つて食うのばやめてけろ】**

つて頼んだずもな。そしたとこら、その鬼ア、

**c【そんだらば、おれとして賭けさしえて、おれが賭けに勝つたらば、その弟、取つて食が、いいか】**  
つて言つたずもな。姉もなんじよにもされねから、

「そだらば、それでもいいます。賭してみてもいい」

つて言つたとこら、その鬼ア、  
**【そだらば、弟と水汲みしねもねえ】**

つて、風呂の水汲みすることにしたと。その時、姉、その鬼の汲む桶の底ば抜いておいだと。弟さば、ちゃんと水この入る桶こ、あずけて水汲ましえたずもな。なんぼ汲んでも鬼のやつ、いつペえになんねかつたと。そして、そこで鬼ア負けてしまつたずもな。鬼ア、悔すがら、

「もう一回、賭けしもねえ」言つたと。(略)

55

50

45

40

35

4

極楽見てきた婆さま

(略)婆さま伸びの伸びて見だと。さつぱり見えなかつたはずもな。

そうすると嫁が後ろの方がら、

「婆さま、婆さま。見えますか」

つたと。

「いや、さつぱり見えねえが」

言つたはずもな。だけ、今度ア少し押してやつたと。

「はい、今度ア見えますか」

つたと。なん一ほしても見えねかつたはずもな。

「さつぱり見えねえや」

つたと。そうすると、嫁ごア、後ろからどーんと、突き落としつたと。

「それつ、そんだらすっかり見ておでれ」

と、どーんと突き落としてしまつたはずもな。

その時、その婆さま、ごろごろと崖転び落ちながら、ああ、この奴ら、おれを殺す氣だなと思つたんだと。なんたつて、こんななところで死んでられつかと思つだから、そこさ吊り下がつてら藤蔓さ、つかまつて助かつたはずもな。それからなんばか、かかつたかわかんねえんども、茨に面かつつかれ、岩に面かつつかれ、眼も鼻も見えんねくれ血ぐるまになつて、上へさえ上がつたんだと。

上さ上がつてみたとこらハア、すっかり日は暮れてらつたと。

息子も嫁ごもいんねかつたはずもな。それから、その婆さま、ア<sup>レ</sup>でここまででは助かつた。そんだども、このままで、おれ、ここで<sup>レ</sup>凍み死んでしまる」と思つたはずもな。イ<sup>レ</sup>どこか宿とんねもねえ」と思つてみたところ、そばにお堂つこ、あつたつたと。ウ<sup>レ</sup>ああ、そんだ、そんだ、今夜ここさ入<sup>レ</sup>えつて泊めてもら<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>氣して、お堂つこの中さ入つたはずもな。なんじよに、崖上<sup>レ</sup>がつてきたもんだから、すっかり疲れてらつたと。ぐつすり寝込んでしまつたはずもな。

それからなんぼくれえか、時間たつたがわがんねども、たい一したにぎやかな音つこで目覚ましたと。さてさて、ここアどこだべな、全体おれなにして、こんななどこさ来てらべなど思つたと。そして、音つこのする方さ行つてまがつて(のぞいて)見だと。そしたとこら、泥棒達、今日取つてきた宝物の分け方をしてらつたと。(略)

(1)ばやし・みさま／昔話研究士曜会)